

『佐土原藩嶋津家日記』～図書館にある第一組の史料

本館には、地域の歴史を記した古文書類や絵図といった貴重な歴史資料があります。

これら貴重な資料は、普段は貴重書庫に保管されていて、常時公開されているものではありません。ホームページで一部デジタルアーカイブとして公開したり、本館主催の企画展や特別展などで展示、紹介していますが、皆様の目に常時触れることがありませんので、余り馴染みがないという方も多いでしょう。

しかし、実は皆様にも気軽にご覧いただける郷土の歴史資料として大変価値のあるものがあるのです。それが『佐土原藩嶋津家日記』です。

これは、江戸時代の佐土原藩のもので、17世紀半ばから19世紀半ばのおよそ200年間にわたり、藩主周辺の日々の出来事や幕府・藩とのかわりを記録した藩政の基本的史料です。佐土原藩は、薩摩藩主であった島津家の分家である佐土原島津家が治めていました。(松本清張の『西郷札』にも詳しく描かれています。) 島津家とはいえ、佐土原藩自体は、約3万石の小藩に過ぎず、お家の格式を守るため、財政面や外交面での苦勞も多かったようです。

日記は藩在所である佐土原と、江戸藩邸で書かれた2種があります。改易や取り潰し、国替えなどが断行された時代に、一地方の藩が200年以上存続し、なおかつ、日々の日記がほとんど遺されていることは、全国的に見ても珍しいことで、江戸時代の日向国と江戸での生活様式を知る上でも大変貴重な資料と言えます。

なぜ、このような歴史資料が皆さんに気軽にご覧いただけるかということ、本館では、この日記を翻刻して、毎年『宮崎県史料』として刊行しているからです。在所の日記を『佐土原藩日記』、江戸藩邸での日記を『江戸日記』として、これまでに刊行しています。これらはすべて本館をはじめ、県内各市町村図書館で閲覧したり借りたりすることができます。

そして今年度末、『佐土原藩嶋津家江戸日記』の第十三巻が刊行されます。

刊行において最も重要な作業は、「くずし字」で書かれている原史料を読み進めながら活字体におこしていく筆耕という作業です。この大変根気のいる筆耕を現在、3人の方々が行っています。

さて、第十三巻の内容ですが、順を追ってみましょう。

今回の日記は、宝暦5年(1755)、同7年、

同8年の3年分が収録されています。主な内容としては、藩主に関わる儀式、儀礼、冠婚葬祭が大半を占めています。

まず、宝暦5年ですが、ここでは、佐土原藩第7代藩主久柄(ひさもと)が、参勤のため佐土原より江戸に到着した部分があります。しかし、その2ヶ月後、宗藩である薩摩藩主の重年が病重く、祈祷の甲斐なく、逝去します。27歳という若い死でした。久柄は、島津家の太守名代として葬儀、幕閣廻り等をこなしていきます。島津宗家は、嫡子又三郎が相続することになりました。後の重豪(しげひで)です。

宝暦6年の日記はなく次は宝暦7年から始まります。この年は、久柄にとって大きな転機となる事柄がありました。それは彼自身の縁組みです。父忠雅がかねてより島津宗家に依頼をしており、島津一族の中より縁組みの相手を選ばれたのでした。久柄は再び参勤で戻った江戸で、その通知を受け取ります。反面、この年は江戸藩邸周辺の架橋工事等での役負担や藩の交際費、諸雑費がかさみ、藩が深刻な財政難に陥っているようです。そのため、儉約と称して、周辺の大名、旗本に対して、贈答や書状を断る旨の連絡をしています。また薩摩藩からの借入金の返還猶予も申請しています。

宝暦8年の日記によれば、久柄は江戸城内の門の一つ、常盤橋門の門番を拜命しています。またこの年は、久柄下向(在所へ戻る)の年で、約1ヶ月かけて佐土原に戻っています。同年、宗藩では、又三郎が元服して重豪と改め、正式に第25代薩摩藩主となりました。その他、分家の旗本当主の病氣療養への見舞いなどの記述が見られます。

今回の日記では、宗藩主重年の逝去に伴う家督相続という重要な場面で、支藩主である久柄が名代を務めるなど、佐土原藩が宗藩である薩摩から信頼され、緊密な関係にあったことがわかります。

刊行間近の『佐土原藩嶋津家江戸日記第十三巻』は、県内で唯一刊行が継続中の郷土の歴史資料です。ぜひご覧ください。

